

音楽教育実践報告誌

第4号

2023年3月

静岡音楽教育研究学会

目 次

| | | |
|---|-------|----|
| 【巻頭言】 | 田代 和久 | 2 |
| 【学術研究（論文）】 | | |
| 学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの活用についての考察——小学校音楽科での 導入及び活用の課題と解消に向けて—— | 山口 亮介 | 3 |
| 【実践報告】 | | |
| 小学校1年における音楽の授業の導入——スタートカリキュラムを取り入れた実践より —— | 角田 匡伸 | 19 |
| <hr/> | | |
| 【事業報告】 | | |
| 2022年度 事業中間報告 | | 24 |
| 第5回総会および第3回研究会〈2022年8月6日（土）開催〉 | | |
| 第3回定例会〈2023年2月4日（土）開催〉 | | |
| 会員による研究発表の報告（小林直喜 角田匡伸 杉山結加奈） | | |
| その他 | | |
| 【常葉大学教育学部初等教育課程 音楽専攻生 特別研究(卒業論文)題目】 | | |
| 2022年度 卒業生 | | 33 |
| 【音楽教育実践報告誌 投稿規約】 | | 34 |
| 【編集後記】 | | 37 |

巻頭言

静岡音楽教育研究学会
会長 田代 和久

今年度は8月の研究会、2月の定例会が久しぶりに対面で開催されました。ポストコロナを見据えた希望の光を見ることのできた有意義な集まりとなりました。研究会では垣内幸夫先生が日本伝統芸能の魅力を、喉を枯らしてまで伝えようとしてくださり、その凄まじい熱量に圧倒されました。定例会では宍戸幽香里先生に特別支援教育の音楽指導について、豊富な実践、教育に裏打ちされた貴重なお話を伺うことができました。それに加えて、今回が初めてとなりますが、教員として活躍している音楽専攻卒業生の角田匡伸さん、小林直喜さん、杉山結加奈さんによる教育実践の発表がありました。授業実践の積み重ねを土台とした、三者三様の説得力ある語り口に大いに惹きつけられました。この発表をもとに本誌にご投稿いただきましたが、発表→投稿という流れが定着し、本研究学会において、現場における教育実践に関する情報発信、情報共有が、ますます活発になることを期待しています。

刊行にあたって複数の役割を担い、献身的に編集に取り組んでいただきました役員の皆様に心より感謝申し上げます。また、会員の皆様からのご意見、ご要望を心よりお待ちしております。気軽にご連絡いただけますと幸いです。そして、静岡音楽教育研究学会の柱となっています研究会、定例会への積極的なご参加、実践報告誌へのご投稿について、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの活用についての考察
—小学校音楽科での導入及び活用の課題と解消に向けて—

山口 亮介*

抄 録

本研究は、今後普及すると考えられる小学校音楽科における学習者用デジタル教科書及び学習者用デジタルコンテンツについて、その導入や活用での有効性や課題について明らかにするものである。令和4年度に小学校音楽科で学習者用デジタル教科書及び学習者用デジタルコンテンツを導入したA小学校、学習者用デジタルコンテンツを導入したB小学校において、児童へのアンケート及び教員への聞き取り調査を行った。

特に音楽づくりの活動において有効活用されており、「リズムの理解」「作品づくりの支援（苦手な児童に対して特に有効）」「楽譜の作成」においての効果や、表現領域でのメトロノームの活用が認められた。一方、指導者用デジタル教科書と学習者用デジタル教科書が異なることで生じる課題、作品の「作成－保存－共有」や教科書やワークシートへの「書き込み－保存－共有」についての課題、授業内で学習者デジタル教科書に書く活動における課題などがあり、その解消の方向性を明らかにした。

学習者用デジタル教科書 デジタルコンテンツ ICT活用 クロームブック

1. 研究の背景と研究の目的

令和4年度において、コロナ禍によりGIGAスクール構想に基づくICT環境の整備が進み、多くの学校において、一人一台の端末の整備及び通信ネットワーク環境の整備が進んでいる。音楽科においても、これまでに教師用（指導者用）デジタル教科書を導入した授業事例は先進校において進められているところであるが、令和6年度の小学校教科書改訂を契機とした、学習者用デジタル教科書及び学習者用デジタルコンテンツ（以下、デジタルコンテンツと述べる）の本格導入に向けて、それらの活用は今後の大きな課題となる。

文部科学省(2019)による『学習者用デジタル教科書実践事例集』では、音楽科の事例は取り上げられていないものの、学習方法の例として、「拡大」「書き込み」「保存」「本文・図表等の抜き出し」「動画・アニメーション等」「ドリル・ワークシート」「大型提示装置による表示」「ネットワーク環境の共有」などが挙げられている。音楽科においても、これらの例を基にした活用についての研究の充実が求められると考える。

小学校音楽科において、令和4年度現在、教育芸術社から学習者用デジタル教科書、デジタルコンテンツが販売されている。また、教育出版からも同様に学習者用デジタル教科書及

* 常葉大学教育学部

学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの活用についての考察 —小学校音楽科での導入及び活用の課題と解消に向けて—

びデジタルコンテンツが販売されており、各学校においてこれまで使用されてきた指導者用デジタル教科書のみならず、学習者にとっての環境も整ってきている。

以上の背景より、本研究の目的を、小学校音楽科における学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツの導入や活用において、令和4年度に導入している学校においてどのような有効性があり、また、生じた課題についての解消の方法や活用における効果的な指導について考察することとした。

2. 先行研究

小学校音楽科におけるデジタル教科書の研究として、坂本暁美(2016)はデジタル教科書の特徴と有効性について、「効果的な提示」「授業運営の円滑化」「興味意欲の喚起」「演奏の補助」について述べている。しかしながら、指導者用デジタル教科書を用いた研究であり、現行の学習者用デジタル教科書を用いたものではない。また、音楽科において一人一台端末の学習環境を想定した研究として、土谷泉・長谷川春樹(2014)は、小学校のリコーダー指導において、一人一台タブレットPCを用意し、一斉指導後の個別学習の場面において指使いを映し出すビデオクリップを活用して練習を行う実践により、現行のデジタルコンテンツの機能につながる実践的な研究を行っている。同様の研究は、深見友紀子・佐藤和紀・森谷直美・中平勝子・堀田龍也(2017)においても確認できるが、これらは、教員による教材作成であり、市販されている学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツを活用したものではない。

ただし、現行のデジタルコンテンツの具体的な活用事例については、音楽之友社編集部・教育出版株式会社・小梨貴弘(2023)が小学校の実践例(教育出版,教育芸術社)、音楽之友社編集部・教育出版株式会社・高道有美子(2023)が中学校の実践例(教育出版,教育芸術社)について紹介しており、複数の有効活用事例については述べられているものの、課題についての記載はない。

なお、他教科での学習者用デジタル教科書を活用した研究として、藤森裕治・青山由紀(2020)は、筑波大学附属小学校第4学年国語科(説明文)の実践記録を用いた分析・考察を行っている。また、小池翔・鈴木秀樹(2021)は、小学校第5学年社会科における授業デザインの検討を行っている。

以上の内容から、小学校音楽科において、現在学校現場において普及しつつある、市販されている学習者用デジタル教科書及びデジタルコンテンツを活用した授業についての研究は確認できなかった。

3. 本研究での学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツについて

本研究では、研究協力校において使用している教育芸術社(令和4年度販売)の学習者用デジタル教科書及びデジタルコンテンツを用いる。

いずれも光村図書が開発したアプリケーション「まなビューア」を用いる。学習者用デジタル教科書の主な機能として、「画面の拡大・縮小」「書き込む機能」「他のデジタル教材やICT機器と一体的に利用」「読み上げ機能」「白黒反転表示機能」「総ルビ機能」があること

を、教育芸術社のホームページ[†]において紹介している。

同様にデジタルコンテンツにおいても、「音楽づくりの実践ができるコンテンツ」「音符や記号の確認ができるフラッシュカード」「メトロノーム、タイマー、鍵盤などの学びアイテム」「リズムカードを並べてリズムづくりができます。」との記載[‡]がある。

4. 研究の方法

令和4年度より学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツを導入している小学校2校を研究協力校とした。両校とも約2ヶ月使用した後に以下の調査を行った。

A小学校は学習者用デジタル教科書及びデジタルコンテンツの導入、B小学校はデジタルコンテンツのみ導入し、授業内で児童が活用できる学習環境である(表1)。また、両校において、クロームブックによる一人一台端末の学習環境は整っており、アプリケーション「まなビューア」を用いて、児童が学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツを活用できるようにしている。

ただし、学習者用デジタル教科書及びデジタルコンテンツを使用することを強制しておらず、教員の必要に応じて活用してもらうように依頼した。

表1 研究協力校の学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの導入環境

| | A小学校 | B小学校 |
|---------------|--------|------|
| 指導者用デジタル教科書 | 3,5,6年 | 全学年 |
| 学習者用デジタル教科書 | 3,5,6年 | |
| 学習者用デジタルコンテンツ | 3,5,6年 | 全学年 |

調査対象学年は、研究協力校の希望によるものとしており、A小学校では、第5学年～第6学年の児童(74名)へのアンケート調査を行い、その後各学級で指導した4名の教員(学級担任4名)への聞き取り調査を行った。ただし、A小学校第3学年において、調査期間内に学習者用デジタル教科書及びデジタルコンテンツの使用がなかったため、今回の調査結果からは省いた。また、B小学校においては、デジタルコンテンツを使用した第4学年～第6学年の児童(240名)へのアンケート調査(表2)を行い、その後、アンケート調査学年を指導した1名の教員(音楽専科1名)へ聞き取り調査を行った。

調査の実施にあたり、教員及び児童への負担を軽減するために、紙媒体でのアンケートとWeb回答(Office365 Forms使用)のいずれかでの回答を選択できる様にした。設問2～9についてデジタル教科書やデジタルコンテンツを使用した児童について四件法を用いたアンケートを行い、質問10は自由記述による回答とし、樋口耕一(2014)によるテキストマイ

[†] <https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/2020es/students/> (2022/11/26 アクセス)

[‡] <https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/2020es/digitalcontents/> (2022/11/26 アクセス)

学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの活用についての考察
—小学校音楽科での導入及び活用の課題と解消に向けて—

ニングツールである KH Corder を用いた計量テキスト分析を行った。

教員への聞き取り調査について、A小学校では、学年毎に調査的面接法を用いた半構造化面接による遠隔でのジョイントインタビューを実施し、B小学校では、半構造化面接による対面でのインタビューを行った。教員への聞き取り調査は以下の内容（表3）で実施した。

表2 B小学校児童へのアンケート

| | | |
|--|--|---|
| <p>このアンケートは、みなさんのクロームブックに入っているデジタルコンテンツについてのアンケートです。名前が分からないようにアンケートを収集できるように設定しています。回答の協力をよろしくお願いいたします。</p> <p>QRコード</p>  <ol style="list-style-type: none"> 1 クロームブックのカメラアプリをひらく 2 みぎうえにある QR コードのイラストをクリックする 3 白いわくの中に QR コードをうつす 4 でできたリンク（字など）をクリックする 5 アンケートにこたえる <p>※ QR コードがよみこめなときは、この紙に回答してください。</p> | | <p>しつもん6 音楽づくりの授業の時にデジタルコンテンツはつかいやすかったですか。</p> <p>こたえ 音楽づくりの授業でつかっていない つかいやすかった ややつかいやすかった ややつかいかいにくかった つかいかいにくい</p> |
| <p>しつもん1 あなたは何年生ですか？（あてはまるものに○をつけましょう）</p> <p>こたえ 4年生 5年生 6年生</p> | | <p>しつもん7 鑑賞（音楽をきく）の授業の時にデジタルコンテンツはつかいやすかったですか。</p> <p>こたえ 鑑賞の授業でつかっていない つかいやすかった ややつかいやすかった ややつかいかいにくかった つかいかいにくい</p> |
| <p>しつもん2 学習者用デジタルコンテンツを使う前の気持ちについて教えてください。</p> <p>こたえ 楽しみ やや楽しみ やや楽しみでない 楽しみでない</p> | | <p>しつもん8 デジタルコンテンツに直接書きこむ学習の時はつかいやすかったですか。</p> <p>こたえ 書きこむ学習はしていない つかいやすかった ややつかいやすかった ややつかいかいにくかった つかいかいにくい</p> |
| <p>しつもん3 学習者用デジタルコンテンツを使った後の気持ちについて教えてください。</p> <p>こたえ 楽しかった やや楽しかった やや楽しくなかった 楽しくなかった</p> | | <p>しつもん9 デジタルコンテンツから音ができることは役（やく）にたちましたか。</p> <p>こたえ 音をだすことはしていない 役にたった やや役にたった やや役にたたなかった 役にたたなかった</p> |
| <p>しつもん4 歌の授業の時にデジタルコンテンツはつかいやすかったですか。</p> <p>こたえ 歌の授業でつかっていない つかいやすかった ややつかいやすかった ややつかいかいにくかった つかいかいにくい</p> | | <p>しつもん10 デジタルコンテンツをつかった音楽の学習について思ったことを自由に書いてください。</p> |
| <p>しつもん5 楽器の授業の時にデジタルコンテンツはつかいやすかったですか。</p> <p>こたえ 楽器の授業でつかっていない つかいやすかった ややつかいやすかった ややつかいかいにくかった つかいかいにくい</p> | | |

表3 教員へ聞き取り調査の内容

- 使用環境について教えてください。（教室、音楽室、机あり、机なし等）
- 音楽の授業で使用した活動について教えてください。（歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞）
- 学習者用のデジタル教科書やデジタルコンテンツを使用する際の児童の様子について教えてください。
- 使用中や使用後の児童の様子について教えてください。
- 導入時の留意点などについて教えてください。
- 各活動（歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞）で有効活用につながった事例について教えてください。
- 各活動（歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞）で有効活用につながらなかった事例について教えてください。
- 書き込む活動についての課題があれば教えてください。
- 音が出ることの有用性について、どのように考えられますか。
- 紙媒体の教科書とデジタル教科書やデジタルコンテンツの使い分けについてどのように行うことが良いと考えますか。
- 学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツの有効性と課題について教えてください。

5. 調査結果

5.1 児童へのアンケート（質問2～9）

A小学校において、第5学年31名、第6学年43名の回答があり、8割5分以上の児童が、学習者用デジタル教科書及びデジタルコンテンツの使用について好意的に捉えており、使用前と使用後の学習への期待に大きな差はなかった（表4）。また、表現・鑑賞の活動において、児童が最も活用したのは音楽づくりの活動であり、使用した児童の多くが使いやすいと感じている（表5）。次いで、器楽、歌唱、鑑賞の授業での使用が確認でき、各活動においても同様に児童は使いやすいと感じていた。鑑賞においては、ほぼ7割の児童が使用していなかった。一方、デジタル教科書に書き込む活動については、ほぼ行われなかったが、書く活動を行った約3割の児童の多くは使いやすかったとの回答があった（表6）。学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツから音が出ることについては、9割以上の児童が役に立ったと答えており、活用の有効性が最も表れる結果となった（表7）。

表4 A小学校の使用前・使用後の回答(N=74)

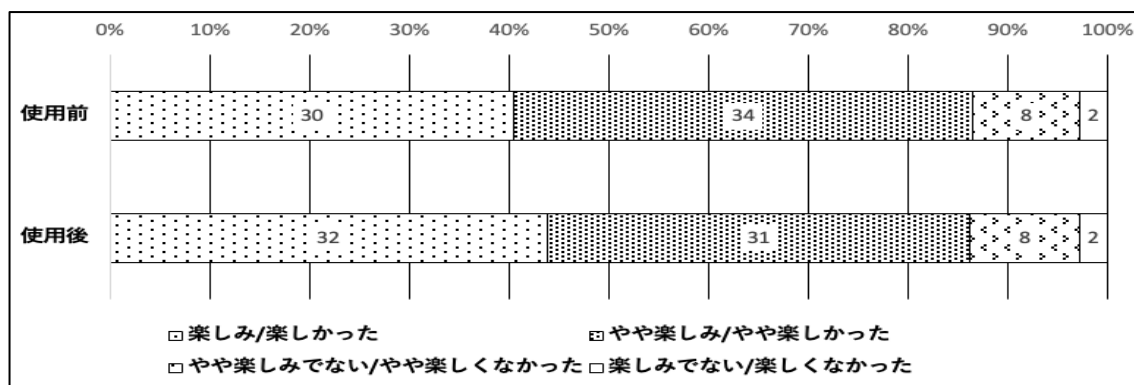
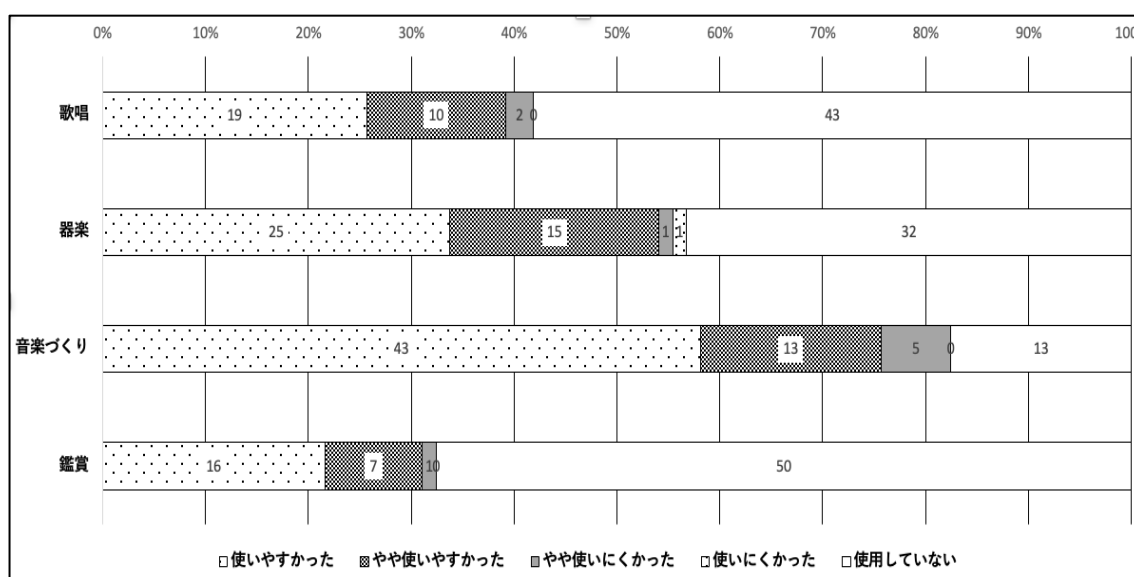


表5 A小学校の表現・鑑賞の活動の回答(N=74)



学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの活用についての考察
 —小学校音楽科での導入及び活用の課題と解消に向けて—

表6 A小学校の書く活動の回答(N=74)

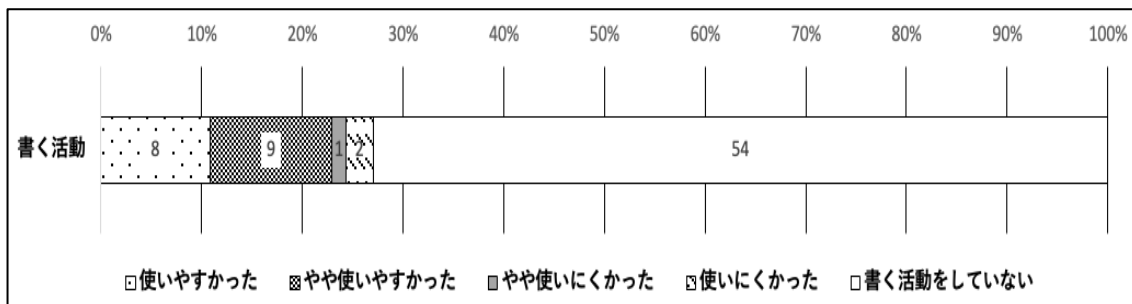
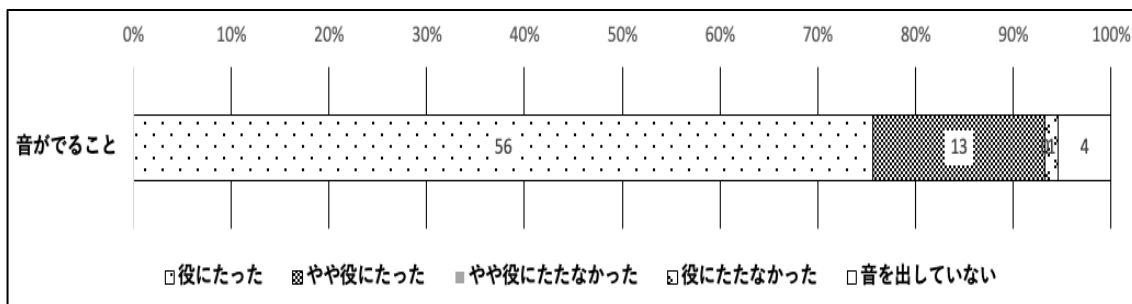


表7 A小学校の音が出ることについての回答(N=74)



一方、デジタルコンテンツのみを使用したB小学校（第4学年78名、第5学年91名、第6学年78名による回答）においてもほぼ同様の結果が得られた。使用前と使用後の学習への期待は共に高かったが（表8）、使用後に楽しかったと答えている児童が約1割増えていることがB小学校の特徴として挙げられる。表現・鑑賞の活動での使用については、B小学校では器楽の活動での使用が最も多く、次いで音楽づくり、歌唱、鑑賞との順になった（表9）。書く活動については、約5割の児童が行っており、活動を行った児童の多くが使いやすいと回答している（表10）。デジタルコンテンツから音が出ることの有効性については、A小学校同様9割以上の児童が役に立ったと回答した（表11）。

表8 B小学校（デジタルコンテンツのみ）の使用前・使用後の回答(N=240)

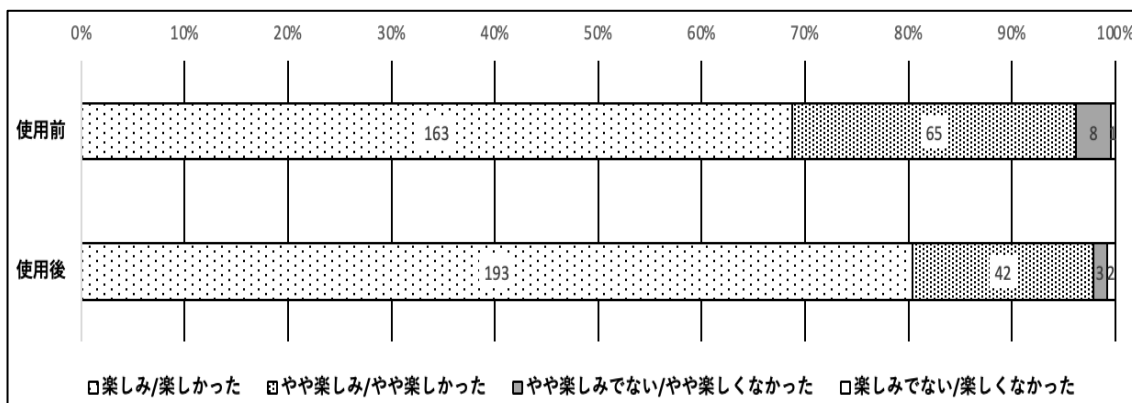


表9 B小学校（デジタルコンテンツのみ）の表現・鑑賞の活動の回答(N=240)

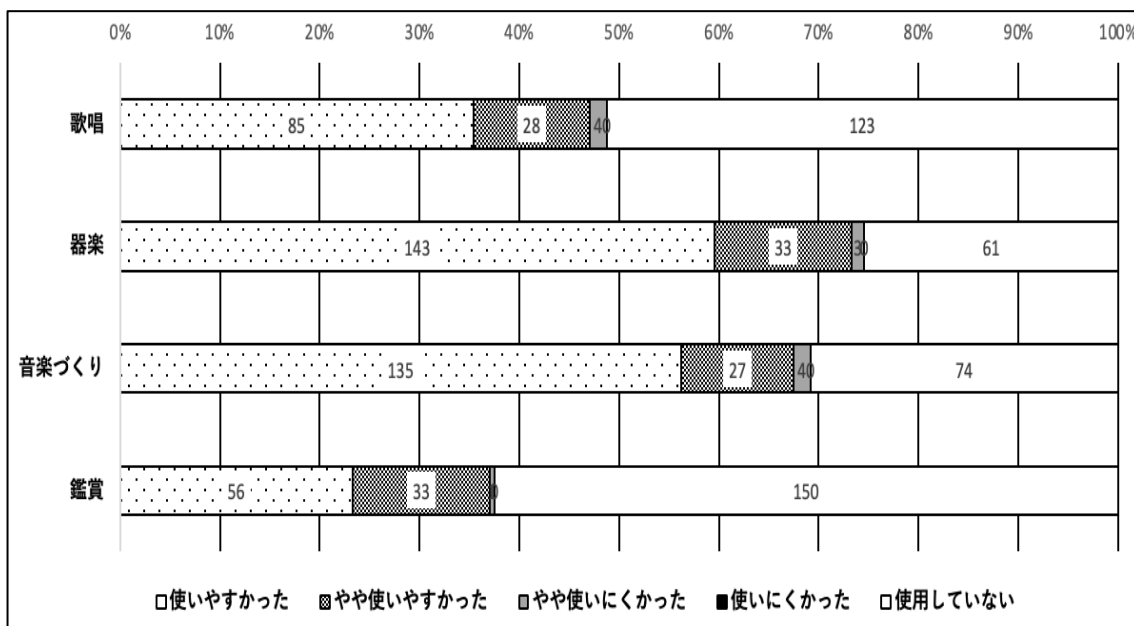


表10 B小学校（デジタルコンテンツのみ）の書く活動の回答(N=240)

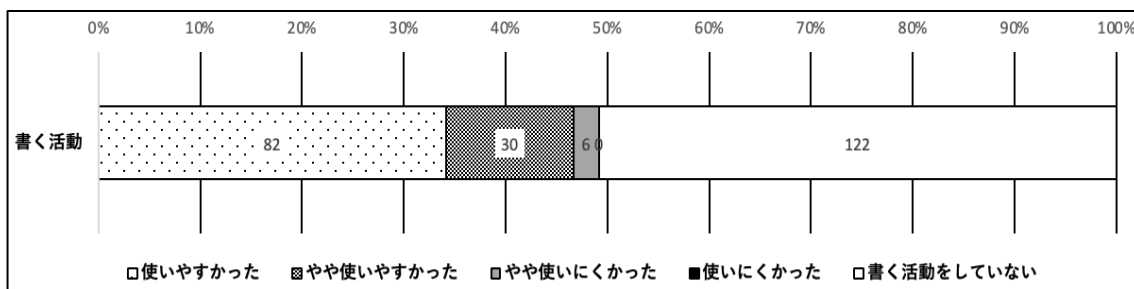
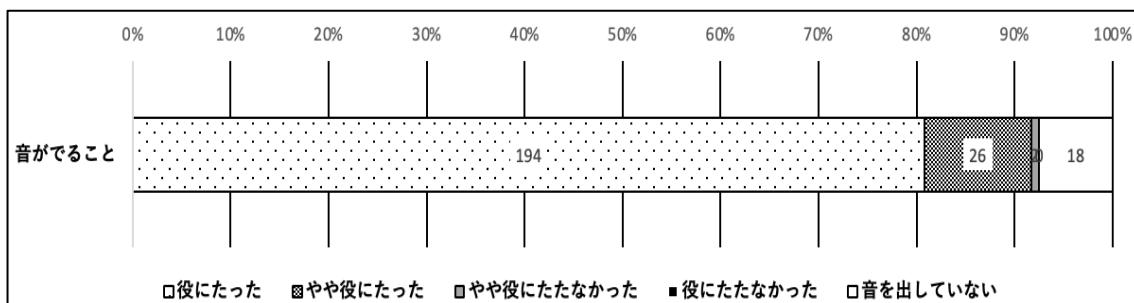


表11 B小学校（デジタルコンテンツのみ）の音が出ることについての回答(N=240)



5.2 児童へのアンケート（質問10）

まず、A小学校の自由記述による分析結果を図1に示す。調査から、「リズムや音符についての記載」「デジタル教科書やデジタルコンテンツの便利さについての記載」「音楽の楽しさについての記載」の3つのカテゴリーに分けられた。

学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの活用についての考察
 —小学校音楽科での導入及び活用の課題と解消に向けて—

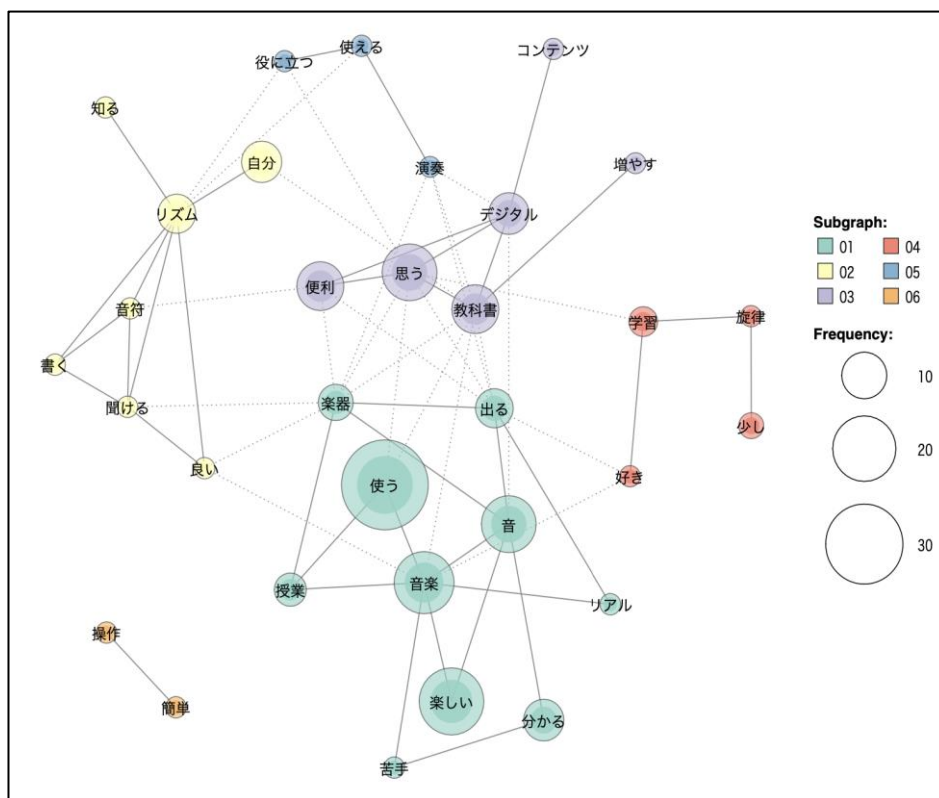


図1 A小学校の自由回答記述の共起ネットワーク（総抽出語数 1,223）

次に、自由回答記述で出現回数が多い抽出語を表12に示す。「楽しい」という語を用いた児童に、「音楽が苦手なぼくでも使いやすく楽しかった。」「とても楽しく授業できる。」「たくさん音が出るのが楽しかった。」と回答があった。また、「便利」という語を用いた児童に、「慣れたら便利だなと思った。」「速さや音符を変えられるのでとても便利だなと思った。」「音が出るのが便利だなと思った。」と回答があった。

表12 A小学校の自由回答記述の上位語（10語以上）

| 抽出語 | 品詞 | 出現回数 |
|-----|----------|------|
| 使う | 動詞 | 38 |
| 楽しい | 形容詞 | 21 |
| やすい | 形容詞（非自立） | 19 |
| ない | 否定助動詞 | 18 |
| 音楽 | 名詞 | 18 |
| 音 | 名詞C | 15 |
| 思う | 動詞 | 15 |
| とても | 副詞B | 12 |
| する | 動詞B | 11 |
| 教科書 | 名詞 | 11 |
| 便利 | 形容動詞 | 11 |

学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの活用についての考察
 —小学校音楽科での導入及び活用の課題と解消に向けて—

A小学校の児童が感じた活用の有効性に関する記述として、「音のリズムが分かりやすい。楽しく授業できる。」「使いやすいし楽しかったのでやる気が出て、音楽の学習が好きになれたような気がしました。」「音楽づくりの時は、どんな風なのかが前はわからなかったけれど、デジタル教科書を使うことで、メロディーを奏でてくれるからとても便利」「操作も簡単だし楽しかったので良かったと思いました。」「コロナが流行しているので、演奏のときに密集しないようにするためにデジタル教科書が使えるのでとてもいい。」「速さや音符を変えられるのでとても便利だった。」「デジタルでの学習は扱いにくいけれど、慣れたらとても便利なものだと思います。」「旋律をつくる学習では、自分でテンポも取れるので良いと思いました。」「音楽が苦手なぼくでも使いやすく楽しかった。」「音楽を自分でつくことはできないけれど、デジタル教科書はかんたんに楽しくできたのでよかった。」などの回答があった。

一方、少数ではあるが、「リズムを自分で作って聞けるのは便利だけど、音符を書き込む際はすごく書きづらい。」「文字の書き込みなどで保存できてなかったりして困った。」「操作をするのが大変だから1回押すだけでできるようにしてほしい。」「鑑賞で書けたら便利だと思う。」「音楽づくりや楽器の学習の時は使いやすかったが、それ以外は使いにくかった。」などの課題が挙げられた。

次に、B小学校の結果を図2に示す。調査の結果から「メトロノームの活用についての記載」「デジタルコンテンツの活用についての記載」「リズムづくりの活動についての記載」「楽譜が苦手な人の活用についての記載」の категорияに分けられた。

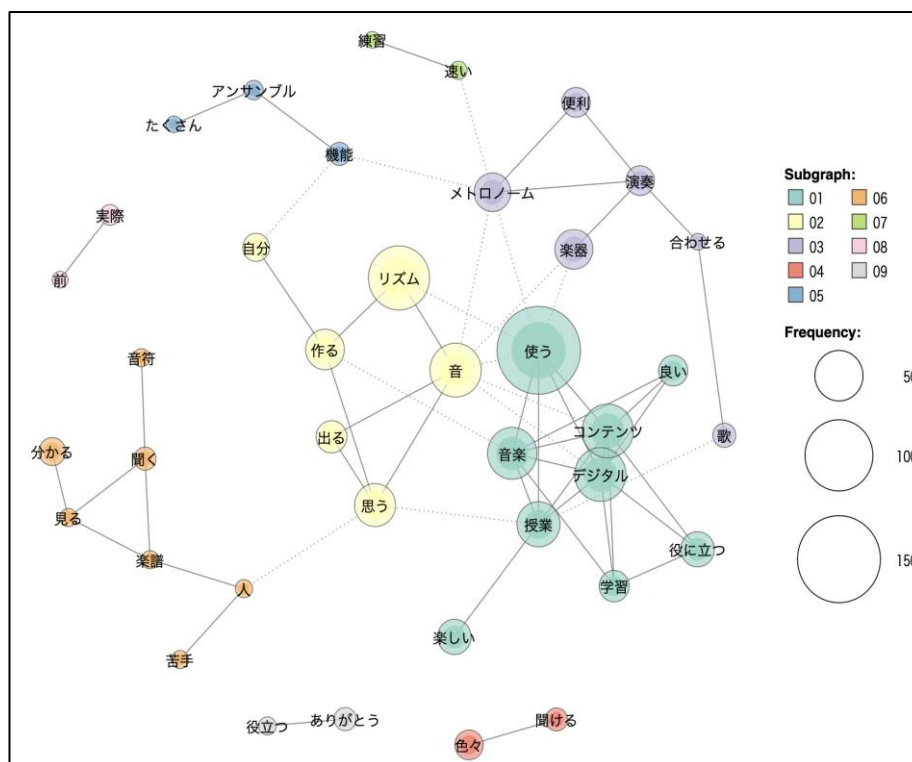


図2 B小学校の自由回答記述の共起ネットワーク（総抽出語数 4,986）

自由回答記述で出現回数が多い抽出語について表 13 に示す。「リズム」という語を用いた児童に、「リズムを自由に作る授業の時に役に立ちました。」「音楽を作るときどういうリズムが良いかよくわかった。」「リズムを作るときに使いやすかった。」との回答があった。「メトロノーム」という語を用いた児童は、「メトロノームを使うと拍が取りやすかった。」「メトロノームを使って色や音があって分かりやすかった。」「メトロノームを一人一人使うことができ便利だった。」と述べている。「楽しい」という語を用いた児童に、「いろいろな言葉を組み合わせて作るのがたのしかった。」「授業がとても楽しく、分かりやすかった。」「すごく便利で音楽づくりがより楽しくなった。」との回答があった。「役に立つ」という語を用いた児童に、「特に音がでることが役に立ったので便利だと思った。」「アンサンブルの時に役に立ったので大切に使いたい。」「リズム作りの時にすごく役に立って使いやすかった。」との回答があった。

表 13 B小学校の自由回答記述の上位語（10語以上）

| 抽出語 | 品詞 | 出現回数 | | | |
|--------|----------|------|-------|----------|----|
| 使う | 動詞 | 153 | すごい | 形容詞B | 23 |
| やすい | 形容詞（非自立） | 110 | 出る | 動詞 | 20 |
| リズム | 名詞 | 81 | 学習 | サ変名詞 | 19 |
| する | 動詞B | 72 | 良い | 形容詞 | 18 |
| コンテンツ | 名詞 | 57 | 演奏 | サ変名詞 | 17 |
| デジタル | 名詞 | 57 | 色々 | 形容動詞 | 17 |
| 音 | 名詞C | 57 | 便利 | 形容動詞 | 17 |
| 音楽 | 名詞 | 53 | やすい | 形容詞B | 15 |
| できる | 動詞B | 49 | 自分 | 名詞 | 15 |
| とても | 副詞B | 45 | 分かる | 動詞 | 15 |
| わかる | 動詞B | 41 | 良い | 形容詞（非自立） | 15 |
| 授業 | サ変名詞 | 40 | 使える | 動詞 | 12 |
| ない | 否定助動詞 | 36 | 歌 | 名詞C | 11 |
| 思う | 動詞 | 36 | ありがとう | 感動詞 | 10 |
| なる | 動詞B | 35 | これから | 副詞B | 10 |
| 作る | 動詞 | 32 | 機能 | サ変名詞 | 10 |
| 楽器 | 名詞 | 31 | 聞く | 動詞 | 10 |
| ある | 動詞B | 29 | 聞ける | 動詞 | 10 |
| メトロノーム | 名詞 | 29 | | | |
| 楽しい | 形容詞 | 24 | | | |
| 役に立つ | 動詞 | 24 | | | |

B小学校の児童が感じたデジタルコンテンツ活用の有効性として、「メトロノームを使うと拍が取りやすかった。」「楽器を演奏するときテンポを刻んでくれたのでとても使いやすかったし、色々なテンポがあって便利だった。」「授業でやった、グループで集まって同じ曲を練習するという学習の時に全員の速さをそろえるためにメトロノームを使いました。画面を見ても、音を聞いても拍が分かるのでとても使いやすかったです。」「自分で旋律を作る学習のときも音符や音を設定すると楽譜通りに流してくれる機能とかは便利だと思ったから、これからも使いたいです。」「メトロノームと鍵盤が使いやすかった。楽器の学習で役に立った。」「リズムの速さ（テンポ）や音を流してリズムが合うかどうかなどがわかりやすい。」「実際にやる前に、試してからできるので、使いやすかったです。」「授業がとても楽しく、わかりやすかった。スムーズになった。」「自分でリズムを決めてその音が流れるのでり

リズムを作って楽器で弾く時に使いやすかった。」「デジタルコンテンツをつかって、授業がスムーズにすすむようになりました。それに、友達や先生と共有しやすくなって、時間短縮になり、時間を有効に使えるようになりました。」「苦手なリズムもすこしできるようになった。」「リズムが、たくさん浮かんだ。」などの回答があった。

一方課題として、「使いやすい時と使いにくい時があった。」「タイピングが苦手な人や、機械が苦手な人は、思いついたりしたときにすぐ楽譜として書き込んだり出来ないのに、楽器で音楽を作る授業などは実際の楽器を使ったりしたほうが良いと思う。」「メトロノームが使いやすかったけど、音があまり出ないからもう少し大きくしてほしいと思った。」「楽譜を書くときなどは、手書きのほうがより高度でその人のレベルに合った学びができると思う。」と回答があった。

5.3 教員への聞き取り調査

A小学校ではアプリケーションソフト Zoom を用いて、第5学年α教諭、B教諭、第6学年δ教諭、γ教諭にインタビューを実施した。

使用環境について、両学年ともに教室や音楽室での使用があった。B教諭からは、イヤホンの使用について「イヤホンは持っていること持っていない子がいて、持っていない子は自分が聞こえる音量でしてねと言いました。」と述べ、α教諭からは「イヤホンは個人で購入しています。イヤホンもあればヘッドホンもいる。」との回答があった。

使用する際の児童の様子については、課題として「持ち帰りができるようになったので、何人か持ってきていない子供がいたので参加できなかった。(α教諭)」「入るのに時間がかかる子がいましたね。パスワードを入れたりとか。私が来るまでに待っている子もいましたね。(B教諭)」など、学習準備で生じた課題が挙げられた。児童の様子として、「子供たちは、初めて使うことが多いので、興味を持ってやったのではないかと思います。音楽での使用がなかったので、音楽でも使えるんだなということで、子供たちは楽しみにしていたのだと思いました。(δ教諭)」との回答があった。

使用中や使用後の様子については、「何がどうすればどうなるかがわからないままやっていたと思いますが、ただ、子供たちなりに集中して目的に応じた活動はやっていた(δ教諭)」「機械に入れるだけで演奏をしてくれたというのがあって、普段なかなかやらない子供たちも意欲的に取り組んでいた。(γ教諭)」「(学習者用)デジタル教科書の方は、ほぼ使っていない。これといって使っていないなというところがなかった。(γ教諭)」との回答があった。

書き込む活動については、「使いこなせたら自分達でできると思います。(α教諭)」「回数的には使えなかったのですが、操作に慣れてくるとできるのではないかと思います。(B教諭)」「クロームブックでの書き込みについては行っていません。子供たちは、基本タッチペンを持っています。デジタル教科書について書き込む指示を教師が出せばできるのではないかと(δ教諭)」「書き込ませていません。書き込む作業は、実際の教科書にさせました。(併用について)使い勝手が良くなれば、デジタル教科書でも良いと思います。(γ教諭)」との回答があった。

音が出ることについては、「音が出ることについて、ものすごく有効性があると思います。子供たちは一人一人イヤホンをはめて、自分の音だけに集中できてやれていることが大きい。(δ教諭)」「イヤホンなしで、音をそれまで大きく出さずに行った。それぞれが自分の

課題に集中してできていた。(Y 教諭)」とその有効性についての指摘があった一方、「教師用と児童用のデジタル教科書は同じものが必須だと思います。(S 教諭)」(教師用と児童用は)全く同じが良いです。(Y 教諭)」と指摘するように、教師用デジタル教科書では音が出るのに、学習者用デジタル教科書では音が出ないことについての混乱が生じたことについての課題が挙げられた。

紙媒体の教科書とデジタル教科書やデジタルコンテンツの使い分けについては、「書いたものを回収できるようにしないと、子供が書いたものは見れない。もし、デジタルコンテンツに書き込むのであれば提出してもらえないと使えない。できればリンクを貼って送信できるようにしてもらえると。ボタンを押せばアドレスが出て。僕らもやりやすいと思います。当たり前になってきたら、(紙媒体の)教科書なしでも良いかなと思います。そっちの方が便利かなと。(A 教諭)」(デジタルコンテンツから私たちに直接つながるようなものでないと。デジタル教科書に丸をつけたりはできそうですね。高学年は、画面に書くのはできそうです。全体で歌う時などは紙の教科書が良いかなと思いますが、個人の活動の時にデジタルコンテンツを使わせようかなと思います。CDだとあっちこっちに行ったりしないといけいけないので、全部入ってくれるといいのかなと思います。(B 教諭)」(デジタル教科書に残したものを、どうやって見るということを私たちが分かっていないので。(S 教諭)」など、デジタル教科書に記入すること自体の課題と、記入したものを共有することについての課題が挙げられた。

学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツの有効性については、「デジタルコンテンツはすごく良かったなと思います。(Y 教諭)」(教師用を使ってとても便利だなと思った(A 教諭)」と述べている。また、「それぞれ興味がある子は家に帰っても活用できるのではないかなと。(Y 教諭)」(自分のところは、音楽のコンテンツを使って練習しておいでという話はしました。(S 教諭)」と述べるように、タブレットの持ち帰りにより、家庭学習や反転学習に活用できるのではという視点での回答があった。一方、課題として「子供たちのクロームブックと、僕たちのデジタル教科書が違う。教師用しか僕らは見ていない。子供たちが使っているのは音が鳴らなかったり、制限がかかっているのかな(A 教諭)」(子供が操作するものが、一緒になってくれたらいいかなと思います。(B 教諭)」と述べている。

B 小学校では、音楽専科として第4学年～第6学年を担当している E 教諭に対面でのインタビューを行った。

使用環境について、「音楽室に Wi-Fi があり、机なし、椅子ありで椅子の中に(クロームブックを)入れて置いています。イヤホンは使っていません。使うことにメリットを感じていません。」との回答があった。

音楽の授業での活動については、「4年生は言葉でアンサンブルの学習で教科書該当ページの使用若しくは学びアイテムの使用、5年生は打楽器アンサンブルの学習で学びアイテムの使用、6年生は器楽でラバースコンチェルトの学習でメトロノーム機能を使用しました。鍵盤ハーモニカは低音楽器の数が足りないのでその時に使用しました。」との回答があった。

学習者用デジタルコンテンツを使用する際の児童の様子については、「中学年にはページを指定して指導しましたが、高学年はいろいろページを紹介して、目的に合わせて好きに使うようにした。」と回答があり、使用についての学年による段階的な指導を試みていること

が確認できた。

使用中や使用後の児童の様子については、「一番多かったのはすごいという声が多く、特にリズムづくりのコンテンツは、自分が作ったものが演奏される。自分が演奏したものの音が出てくるので、「太鼓の達人」のような感覚で確かめられるので感動していた。6年生は使い慣れていることもあり、今まではクロームブックでメトロノームを検索して、使っていたが、視覚的に拍が分かるものを使用できることが良かった。」と回答があった。

導入時の留意点については、「ICTに乗り気ではなかった学級には、今まで不便に感じていたものを共有し機能の紹介をした。」と回答し、導入でのガイダンス指導を行ったことが確認された。

有効活用につながった事例として、「メトロノームを使うことが有効活用につながった。音楽づくりの場面でリズムを作り、確かめられることがわかったので、今後の学習で旋律づくりも使っていきたい。」と回答があった。

書き込む活動については、「打ち込むとなると、Googleのコンテンツを使って行いたいです。手書き自体が専用のデジタルペンがない状態では難しいです。」と回答があり、他のアプリケーションとの連携の必要性について確認できた。

音が出ることの有効性については、「今まで手本など自分が作ったもの確かめることができなかつたので、それを人の手を介さずにできることが良かった。」との回答があった。

紙媒体の教科書とデジタル教科書やデジタルコンテンツの使い分けについては、「(教科書に記載されている)教材曲を使うが、基本教科書を使うことは少なく、リンクしたページよりも学びアイテムのような、どの活動でも使えるものが今後有効に活用できると考えます。」との回答があった。

学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツの有効性と課題については、「音楽づくりにおいて今まで自分が作ったものを演奏しないと確かめられないが、入力で確かめられる。リコーダーの学習時に運指を確認できる。3、4年生にとっては良いのではないかと感じた。音楽教育ではなく、音楽をする(将来、メトロノームを使えばみんなと合わせられるんだという)ことに役に立つのではないかと考える。音楽が得意だからこそ必要性を感じていない子供がいる。また、音楽が苦手だからこそ、操作に慣れるまで親しみを感じきれない子供がいる。」との回答があった。

6. 考察

6.1 活用の有効性について

今回の調査を通して、多くの児童や教師が学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツに有効性を感じていた。学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツから音が出ることについて、9割以上の児童が役に立ったと答えていること、教員からも音が出ることの有効性についての回答があった。

その中でも、両校において、特に音楽づくりの活動でデジタルコンテンツが使用され、「リズムの理解」「作品づくりの支援(苦手な児童に対して特に有効)」「楽譜の作成」について、児童側からも教員側からも有効性について肯定的な回答が多く得られた。

B小学校では、歌唱や器楽の活動での活用があり、デジタルコンテンツにある学びアイテム内のメトロノームや鍵盤の機能を活かした授業を行い、教師も児童もその有効性を感じ

取っていたことが特徴として挙げられる。また、リコーダーの運指や楽語の確認などについても活用がなされていた。

また、「音楽が苦手なぼくでも使いやすく楽しかった。」「苦手なリズムもすこしできるようになった。」などの回答が児童より複数あがっていることから、授業内での教師の支援が必要な児童にとっての手立ての一つとして、学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツが有効に機能したのではないかと考える。

6.2 活用の課題について

本研究の調査における課題は3点挙げられる。

まず、A小学校において、指導者用デジタル教科書と学習者用デジタル教科書の内容が異なるために授業内での混乱が生じたことである。教員の回答から、学習者用デジタル教科書においても指導者用と同様に、音声や動画が視聴できるようなものを期待しており、現状の学習者用デジタル教科書の活用の難しさについての指摘があった。このことは、Y教諭が述べる「(学習者用) デジタル教科書の方は、ほぼ使っていない。これといって使っていないところがあった。」という回答の要因の一つになっていると考える。今後、学習者用デジタル教科書でも、歌唱や器楽の授業時にパートごとの音声を視聴できる、鑑賞の授業でも、全体視聴、部分視聴、楽譜と関連した音声視聴ができることが必要であると考え。次に、音楽作品の作成や教科書の書き込みはできるものの、保存や共有について課題が生じていることが挙げられる。作品の「作成—保存—共有」、教科書やワークシートの「書き込み—保存—共有」、さらに演奏の録音・録画を共通の動作環境で行うことができることが望ましいと考える。つまり、同じアプリケーション内でのデジタルによるポートフォリオ(以下「eポートフォリオ」と述べる)の作成をできることが良いが、現状の協力校の学習環境では困難であることと、協力校において学習の成果物を共有できるアプリケーションの導入がなかったため、有効活用とならなかった。

最後に、授業内で学習者デジタル教科書に書き込む活動においては、現状では学校でのタッチペンの普及、記入後の保存、共有に課題があると考え。この点についても、今後改善や別のアプリケーションの有効活用の事例を共有することが望ましいと考える。例えば、松長誠(2022)は、クロームブックの使用において、背景として楽譜の画像データを貼り込めるJamboardを作成、編集し、付箋機能やペンツールを使って書き込んだものを、Classroomの「授業」から「資料」で配布することで、全員の学習成果物を画面で共有することを紹介している。このことにより両校の環境においても、学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツによる成果物を画像データとして保存し、共有することが可能となるため、多くの学校でこのような活用事例の共有が必要であると考え。

7. 今後の課題

文部科学省(2021)は、GIGA スクール構想のもとでの小学校音楽科においてICTを活用するポイントについて、「音楽を音声と画像の両方で確認することなどが可能であり、聴覚だけでなく視覚などを働かせながら、音楽表現を工夫したり、音楽を聴き深めたりしていくことができる。」「自分達の演奏を録音や録画で残すなど学習履歴を蓄積することができ、学習の振り返りや成果の確認に生かすことができる」の2点をICT活用の利点として挙げて

いるが、本研究においては、前者の有効活用は確認できたものの、後者についての有効活用は確認できなかった。

さらに、ICT活用の例として、「ICT端末で範奏を聴きながら各パートを演奏したり、自分たちの演奏を録音・録画するなどしながら表現の仕方を工夫したりする。(表現)」「ICT端末で音のつながりを様々に試し、聴覚や視覚などから音の組合せの特徴を捉え、自らの表現に生かすようにする。(表現)」「ICT端末で自分が気になったところを何度でも繰り返し聴いたり、クラウドを活用して感じたことなどについて友達と交流したりすることで、より深く音楽の良さを感じ取ることにつながるようにする。(鑑賞)」「学習の振り返りや成果の確認に生かすなど、学習のポートフォリオとして活用する。(表現、鑑賞)」の4例が示されている。しかし、本研究においては2例目のみの確認であった。

志民一成(2021)は、音楽科における一人一台端末の効果的な指導について「一人一台端末を活用することで、自分たちの演奏を客観的に確認したり、それを蓄積して学習の振り返りに活用したり、クラウドを活用して友達と共有したりすることができるという利点がある。(中略)学習で記録した演奏等をポートフォリオとして保存し、それを学習の成果を確認する機会を設けることも、一人一台端末の有効な活用の一例である。」と述べており、今後音楽科学習でのeポートフォリオを用いた実践的な研究事例の共有が必要であると考える。

また、A小学校においては、教員用研修動画の必要性についての指摘があった。日々忙しい中、改めて研修の時間を設けることは困難であることから、指導者用デジタル教科書の使用例などについて、教師用指導書などからQRコードなどを用いて、必要に応じて視聴できるようにすれば、授業での有効活用につながると考える。

以上から、今後、学習者用デジタル教科書やデジタルコンテンツが普及したとしても、その他の整備や環境、また学習者用デジタル教科書自体の質の向上や関係アプリケーションの連携、教師のICT活用技能の向上などが図られないことには、各々の学校での有効活用に課題が生じると考える。

引用・参考文献

- 文部科学省(2021)「端末利活用状況等の実態調査(令和3年7月末時点)(速報値)
https://www.mext.go.jp/content/20210830-mxt_jogai01-000009827_10.pdf (2022.10.14アクセス)
- 文部科学省(2019)「学習者用デジタル教科書実践事例集」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/_icsFiles/afieldfile/2019/03/29/1414989_01.pdf (2022.10.14アクセス)
- 坂本暁美(2016)「小学校音楽科デジタル教科書活用の実証研究」『四天王寺大学紀要(61)』, 四天王寺大学, pp.177-196.
- 土合泉, 長谷川春生(2014)「リコーダー指導におけるタブレットPCを活用した個別学習支援教材と単元の開発」『日本教育工学会論文 37(4)』, 日本教育工学会, pp.459-468.
- 深見友紀子・佐藤和紀・森谷直美・中平勝子・堀田 龍也(2017)「小学校音楽科リコーダー学習における一人1台端末を活用した家庭学習が技能に及ぼす効果」『日本教育工学会論文誌 41(1)』, 日本教育工学会, pp.89-96.

学習者用デジタル教科書・デジタルコンテンツの活用についての考察
—小学校音楽科での導入及び活用の課題と解消に向けて—

- 音楽之友社編集部・教育出版株式会社・小梨貴弘(2023)「教科書準拠学習者用デジタルコンテンツを活用しよう」『教育音楽小学版第78巻第2号』, 音楽之友社, pp.35–39.
- 音楽之友社編集部・教育出版株式会社・高道有美子(2023)「教科書準拠学習者用デジタルコンテンツを活用しよう」『教育音楽中学・高校版第67巻第2号』, 音楽之友社, pp.43–47.
- 藤森裕治・青山由紀(2020)「学習者用デジタル教科書を用いた国語科の授業」『文教大学教育学部紀要(54)』, 文教大学, pp.205–220.
- 小池翔・鈴木秀樹(2021)「小学校第5学年社会科における学習者用デジタル教科書を活用した授業デザインの実践的検討」『日本デジタル教科書学会発表予稿集10』日本デジタル教科書学会, pp.27–28.
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』, ナカニシヤ出版.
- 教育芸術社(2020)『小学生の音楽 第4学年 学習者用デジタル教科書』, 教育芸術社.
- 教育芸術社(2020)『小学生の音楽 第5学年 学習者用デジタル教科書』, 教育芸術社.
- 教育芸術社(2020)『小学生の音楽 第6学年 学習者用デジタル教科書』, 教育芸術社.
- 教育芸術社(2020)『小学生の音楽 第4学年 学習者用デジタルコンテンツ』, 教育芸術社.
- 教育芸術社(2020)『小学生の音楽 第5学年 学習者用デジタルコンテンツ』, 教育芸術社.
- 教育芸術社(2020)『小学生の音楽 第6学年 学習者用デジタルコンテンツ』, 教育芸術社.
- 松長誠(2022)「音楽の授業で Chromebook を活用しよう！これだけ押さえれば大丈夫！授業に生きる活用術」『教育音楽小学版 第77巻第12号』, 音楽之友社, pp.28–37.
- 文部科学省(2021)「GIGA スクール構想のもとでの小学校音楽科の指導について」
https://www.mext.go.jp/content/20211005-mxt_kyoiku01-000015485_ongaku_ts.pdf
(2022.10.14 アクセス)
- 志民一成(2021)「音楽科における一人一台端末等の効果的な活用について」『初等教育資料』東洋館出版社, pp.42–47.

《実践報告》

小学校1年における音楽の授業の導入 —スタートカリキュラムを取り入れた実践より—

角田 匡伸*

1. はじめに

本実践を行う理由は、筆者が小学1年担任2度目であり見通しを持って学級経営を行いやすいこと、また、先輩教師から与えられた教材や方法を使用するだけではなく、独自の方法を生み出すことができないだろうかと考えていたことの2点にある。

これらの理由から、本実践を行うことに至った。

2. 実践を行うにあたり

2.1 地域や子どもの実態

まずは、実態把握に努めることとした。筆者の勤務している学校の地域は、幼少期を地域で過ごし、上級学校へ進むに連れて上京する方が比較的多い。また、社会人になり持ち家を求めて実家近くへ戻ってくる傾向も多いのがこの地域の特徴である。それ故に、保護者には卒業生が多い。

そのような地域において、子どもたちが日々成長しているわけであるが、学区が広いため、それまでに育ってきた環境が様々であることも事実である。また、子どもたちがそれまで通っていた幼稚園、保育園、こども園は8園であり、それぞれの特色を生かした教育をしている。

2.2 小学校低学年での音楽科の扱いについて

次に学習指導要領を調べていくことにした。小学校学習指導要領解説音楽編では、小学校入学当初における教育課程編成のあり方について次のように示してある。

(6) 低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすると共に、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。
(小学校学習指導要領解説音楽編 p120 より抜粋)

このようなことから、スタートカリキュラムが音楽科の授業へと繋げる掛け橋的な存在になると考え、まずはスタートカリキュラムの実施から始めた。

* 静岡市立服織小学校

2.3 スタートカリキュラムの導入と実施

スタートカリキュラムについて、小学校学習指導要領解説音楽編では次のように示されている。

スタートカリキュラムとは「小学校入学当初においては、生活科を中心に合科的・関連的な指導を行ったり、児童の生活の流れを大切に弾力的に時間割を工夫した指導を行ったりして、幼児期の終わりまでに育った姿が発揮できるよう教育課程編成上の工夫」のことである。
 (小学校学習指導要領解説音楽編 p121 より抜粋)

筆者は、子どもたちが、複数園という様々な特色のある教育環境から入学していることを踏まえ、スタートカリキュラムが必要であると判断した。また、学級によって差が生まれないう、学年で統一したスタートカリキュラムを計画・実施することとした。

2.3.1 本校のスタートカリキュラム（令和4年度版）

今年度の本校のスタートカリキュラムには、2つのねらいがある。

- ①小学校のスタートにおいて、子どもたちの不安と期待感に応えるべく、時間配分・内容等を工夫し、子どもたちがスムーズに小学校生活に適應できるようにする。
- ②個別の支援を要する子が、安心して過ごせるようにする。

この2つのねらいを達成するために、3つの言葉を中心にカリキュラムを考える必要があった。それは、子どもたちの思いに応えるために①安心、②成長、③自立のキーワードを掲げ、安心できる居場所づくり・自己発揮できるような場の設定、子ども主体の学習活動の展開をすることであった。

そこで、子どもの不安を解消し、思いに応えるカリキュラムとして、園と小学校生活との違い（ギャップ）を狭め、安心感を持たせ、徐々に小学校生活に慣れるために、園での生活、ギャップを狭める手立て、子どもの適應の3つの視点から安心感を持たせる方法を考え、実践した（表1）。

上記で示した下線部分の園と小学校生活との違い（ギャップ）とは、入学後の子どもたちが抱くギャップ感のことである。例を挙げると、園は毎日が同じ生活であるが、小学校は様々な教科に分かれていることや日課表を基に時間で動いていること、また、園は遊びが主体であるが、小学校は学習活動が主体であり、授業としての学びを体感できるのかということなどの違いが、子どもの心にギャップ感を抱かせると考えられる。

表1 安心感を持たせる方法（音楽科に関連するものは下線有りとしている）

| 園の生活 | ギャップを狭める手立て | 子どもの適應 |
|---|--|--|
| 毎日同じ生活 ・自由遊び主体 ・集団遊びは親しんでいる ・創作活動が多い | ○一日の流れのパターン化 登校から8：15まで 生活用具の置き場所 6年生との関わり 朝の会～1時間目をモジュール化 | ・登校してからの生活リズムの固定 ・知っている歌、手遊び ・学年共通で同じリズム、同じ言葉で指導する |

| | | |
|---------------------|---|----------------------------|
| | <p>「わくわくタイム①」</p> <p>①あいさつ</p> <p>②<u>歌</u></p> <p>③健康観察</p> <p>④連絡帳の点検</p> <p>「わくわくタイム②」</p> <p>⑤<u>手遊び</u></p> <p>⑥学校の話</p> <p>⑦<u>ゲーム</u></p> | |
| 複数園からの入学 ・友達がいない | <p>○友達をつくる</p> <p>クラス・学年の中に友達をつくる</p> <p>学年・支援員など身近な先生の名前を知り、親しむ。</p> <p>①<u>一緒に歌や手遊びをする</u></p> <p>②ゲームを通して仲間づくり、友達や先生の名前を覚える</p> <p>③ペアの6年生を覚える</p> | 慣れ親しんだ遊びの中で、 友達関係を築く |
| 遊びの中の学び | <p>○生活科を中心として、合科的に扱う</p> <p>学校探検を楽しみながら、学校施設やルールを学んでいく</p> <p>生活に必要な場所を覚える</p> | 友達と一緒に施設やルールを学び、行動範囲を広げていく |

ギャップを狭める手立てにあたる「わくわくタイム」では、より具体的な展開として大分県教育委員会スタートカリキュラム実践事例集から内容を一部変更して扱った。

2.3.2 カリキュラム内容

内容は大単元「いちねんせいになったよ」全22時間である。中単元「はじめまして教室」（5時間）、「はじめましてみなさん」（10時間）、「はじめまして学校」（7時間）となっている。特に、音楽の授業に関連があるものとして、単元の間にある「はじめましてみなさん」の中から小単元「歌やゲームで遊ぼう」（5時間）では、今後の音楽の授業でも扱うことができる教材のみを選曲した。このことにより少しでも早く音楽の授業への繋がりを持てるようにした。

これらの実践に当たっては、大分県教育委員会が示しているスタートカリキュラムの実践事例集を参考とした[†]。

[†] <https://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/2002579.html> (2022年4月16日アクセス)

2.4 スタートカリキュラムと音楽科の授業との繋がり

朝の時間から1時間目にかけて行っていた「わくわくタイム」を主とする活動から、いよいよ授業としての音楽に変化していく。そのために、子どもたちがスムーズに授業に向き合うことができるよう、前述のように繋がりを意識した選曲を行った。

選曲については、意図的に子どもたちが幼稚園等で慣れ親しんでいるであろうものや、音楽の教科書に載っているもの、小学校で覚えて欲しいもの等を選んだ。

扱った歌唱教材は次の通りである。

「さんぽ」・・・身体を動かしたり、歩いたりしながら歌う。

「かもつれっしゃ」・・・みんなで歌って遊ぶ。じゃんけんをする。

「校歌」・・・歌詞を書いた紙を見ながら、一緒に歌を練習する。

「おちゃらか」・・・手遊びをしながら歌う。

「なべなべそこぬけ」・・・人数を変えて仲間を増やしながらかみ手を繋いで歌う。

「犬のおまわりさん」
「こいのぼり」 } 2つは教科書の挿絵を見ながら子どもたちから出てきた歌。

「ひらいたひらいた」・・・全員が揃ったら、円になり歌いながら踊る。

3. 本格的な教科学習の始まりと授業の導入

スタートカリキュラムを経て、本格的に音楽科の授業になる。しかし、授業の形に慣れていない子どもたちに、いかに気持ちを切り替えさせるかが課題となっていた。そのような中で、筆者の独自の方法として授業の導入では「わくわくタイム」等で使用した曲を引き続き活用することで、音楽の授業への雰囲気作りや気持ちの切り替えがスムーズにできるようにした。また、その後の授業時間の確保を考え、時間は5分程度に収められるようにした。

【筆者の考案した独自の方法】

パターン1

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①「かもつれっしゃ」・・・友達と二人組になる。②「なべなべそこぬけ」・・・手を繋いで向かい合わせになったり、背中合わせになったりする。③解散して①②を繰り返す。 |
|--|

パターン2

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">①「かもつれっしゃ」・・・友達と二人組になる。②「おちゃらか」・・・相手と向かい合わせになり、じゃんけんをする。③解散して①②を繰り返す。 |
|---|

上記2つのパターンを筆者が弾き分けたりミックスしたりして、その時の子どもたちの心の状況を見極めて行った。

4. 成果と課題

音楽を1つの授業として行っていく中で導入を工夫することで、音楽の授業全体を通しての穏やかな雰囲気確立され、子どもたち自身の気持ちの切り替わりが容易になっていった。そして、今どのような授業をしているのか、これから何をしていくのかを明確にする意識づけができた。また、子ども同士の繋がりがより強固なものになり、関わり合いながら楽しく活動をすることで、授業の目標に迫ることができた。

しかし、どのような授業内容でもこの導入を使えるわけではなく、表現の活動を主に行う場合には有効であるが、鑑賞の活動を主に行う場合は、かえって落ち着きがなかったり、休み時間との区別ができにくくなったりしている子が見られた。

このようなことから、教師側で授業の目標に迫ることができるよう調整をしなければならぬことがわかった。

5. 終わりに

筆者は、子ども自身が「楽しそう」「やってみたい」と思う授業にするためには、教師が何らかの意図を持ち、積極的に子どもたちに仕掛けていくことこそ低学年の音楽のあり方と考えている。これからも、活動を通して音楽の授業で身に付けさせる力を確実に付けていくためにはどのような手立てがあるのか、学年に応じて考えていきたい。

引用・参考文献等

文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編」東洋館出版社 pp120-121

文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター（編）（2015）「スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方がわかる スタートカリキュラムスタートブック——学びの芽生えから自発的な学びへ——」https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf（2022.12.26 アクセス）

文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター（編）（2016）「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム——スタートカリキュラム導入・実践の手引——」https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_180322.pdf（2022.12.26 アクセス）

2022 年度 事業中間報告

【第5回総会および第3回研究会】2022年8月6日（土）

上記日程にて3年ぶりに対面で第5回総会、第3回研究会を開催しました。第3回研究会では、コロナウィルス感染症の影響で2年連続延期となっていた垣内幸夫先生による下記講演会を開催致しました。

1. 講演・ワークショップ

「日本伝統芸能の魅力に迫る ～能・文楽・歌舞伎の実践を通して～」

講師：垣内 幸夫先生《京都教育大学名誉教授》

【第3回定例会】2023年2月4日（土）

第3回定例会では、新型コロナウイルス感染症の影響で昨年度延期となっていた宍戸幽香里先生による講演会、及び会員による研究発表を開催致しました。

1. 講演・ワークショップ

「特別支援教育の個から集団へー行動・心へのアプローチ」

講師：宍戸 幽香里先生《国立音楽院音楽療法学科講師》

《日本音楽療法学会関東支部幹事》

《元常葉大学短期大学部 客員教授（音楽療法）》

2. 研究発表（会員による研究発表）*

①小林 直喜（音楽専攻第26期生・静岡市立清水飯田東小学校教諭）

「主体性を育てる音楽づくり領域での実践（低学年）」

②角田 匡伸（音楽専攻第23期生・静岡市立服織小学校教諭）

「スタートカリキュラム実施時期における音楽科教育の導入例」

③杉山 結加奈（音楽専攻第33期生・静岡市立梅ヶ島小中学校教諭）

「音楽科教育におけるICTの活用例」

*研究発表の詳細は、次頁「第3回定例会 研究発表報告（pp.25-32）」をご参照ください。

【その他】

(1)「音楽教育実践報告誌」発行について：第4号を刊行しました。

(2)「卒業生による事業・演奏会補助」事業について：今年度は、申請者がありませんでした。

（文責：明和 史佳）

研究発表①

主体性を育てる音楽づくり領域での実践（低学年）

小林 直喜（静岡市立清水飯田東小学校）

1 はじめに

音楽の授業を行う上で、いつも悩んでいることがある。それは、子どもに「問い」を生ませることがなかなかできないことだ。「問い」そのものが何を指すかは簡単には言い表せない部分があるので、ここでは子どもたちがもつ疑問・子どもたちから生まれる問題を「問い」としたい。どの授業でもきまって教師が「～しましょう。」と投げかけ、それに対して子どもたちは活動する。子どもたち自身から「もっと～するにはどうしたらいいのだろう。」「なぜ～になっているのだろう。」という疑問や問いを引き出すには、どうすればいいのだろうか。大それたことではなく、普段の授業の中で実践できるものをベースにしたいと考えた。

今回は、2つの観点に絞った。

1つ目は、「子どもの心が動く題材を通しためあての言葉」である。題材の導入だけは、どうしても教師から投げかけざるを得ない。だからこそ、子どもたちがやらされる音楽ではなく、やりたい音楽と捉えられるように題材を終えたときの姿がイメージしやすく且つ魅力的であることを伝えられる言葉を精選した。

2つ目は、「見通しを教師と子どもで共有すること」である。これには1つ目のめあての言葉も当てはまるが、何のためにこの時間を学習するのかという意図と、どうすればできそうかというやり方をどの時間にも教師と子どもで共有した。音楽づくり領域では、作る手順が正確に伝わらないとどうしていいか分からずに困ってしまう子が多い。歌唱領域や器楽領域のように演奏することとは違い、条件設定に応じて自分で考える必要がある。だからこそ、見通しを共有して子どもたちに「これならできそう」と思わせることが大切になると考えた。

上記の2点を授業構想の中に組み込み、授業実践を行った。

2 学習指導案

第2学年1組 音楽科授業案

授業者 小林 直喜

- 1 日時 令和4年7月20日（水） 第1校時 場所 音楽室
- 2 題材名 せいかつの中にある音を楽しもう A表現（3）
音楽づくりウ（ア）（全4時間）
- 3 題材及び本時の展開

| 時 | 学習問題 | ・手立て【評価観点（方法）】 |
|---|---|--|
| 1 | 題材を通しためあて 『身のまわりの音を使って音楽をつくり、ハモネプ大会を開こう。』 本時のめあて 身のまわりにある音をさがして、声にしよ | ・音の種類（動物・乗り物・自然・生活音等）を確認し、自由に生活の中の音に耳を傾けることができるようにする。 ・オノマトペも認め、様々な音の特徴に気付くことができるようにす |

| | | |
|--|--|---|
| | う。 | る。 ・一番気に入った音を決め、次時のグループ分けに生かす。 【知（発言・ワークシート）】 |
| 2 | 声の出し方を工夫して、見つけた音を紹介しよう。 | ・モデリングで声の出し方の工夫（強さ・長さ・高さ）を考え、工夫の観点を共通理解する。 ・音の種類によってグループを作り、即興的に表現する。 ・グループで考えた声の出し方を全員の前で発表し、特徴や面白さを共有する。 【技】（発言・演奏・ワークシート） |
| <p>本時の目標（3/4） 3人組で音の重ね方を考えることを通して、つくる音楽の長さや演奏の順番を変えながら短い音楽をつくることができる。【技能（演奏・ワークシート）】</p> | | |
| 段階 | 学習活動 | ・手立て※支援【評価観点（方法）】 |
| つかむ | <p>○音楽あそび。 「即興：鳥の声でアンサンブル」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">3人で音を組み合わせて、音楽をつくろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・どうやって作ればいいの。 ・合わせればいいのか。 <p>○つくり方を確認しよう。（図と実演）</p> <ol style="list-style-type: none"> ①ずっと繰り返す音を決める。 ②他の二人がどこで歌うか決める。 ③実際にやってみる。 <p>※①～③を繰り返し、これがいいと思うものを見付ける。</p> <div style="border: 3px double black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px 0; text-align: center;">どんな重ね方にしようかな。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・私が歌うのは最初がいいかな、後がいいかな。 ・ずっと繰り返す音を変えてやってみよう。誰がいいかな。 ・順番を増やしていくと、大きくなっていい感じ。 ・かえるの合唱みたいにずらしてみたよ。 ・ずっと全員で歌ってみたけど、何か面白くないな。 <p>（再構成）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○○グループのように、順番を変えてみよう。 ・ずらすアイデアを真似したら、いい感じになった。 | <ul style="list-style-type: none"> ・前時までに、個人で音を選び、似た音同士で3人組に分けておく。 ・教科書を確認し、音の組み合わせ方の手順を共有する。 <p>※つくる音楽の長さを4～8小節（約20秒程）とし、演奏しやすくする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つくる音楽は、無拍節でもよいこととする。 <p>※苦手意識のある子には、ずっと反復する声を担当するように伝える。</p> <p>※各グループにホワイトボードを用意し、重ね方を視覚化して考えられるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試した音の重ね方をワークシートに記録する。 ・つくった音楽がどんな感じか、聴き取りやすい場所をつくる。 <ul style="list-style-type: none"> ・新しい重ね方を考えたグループが出たら随時全体に紹介し、アイデアを生かせるようにする。 ・考えては演奏し、演奏しては考え直す等試行錯誤する時間を保障する。 ・音の重なり以外の要素を工夫している姿が表れたら、大いに認める。 |
| ついきゅうする | | |

| | | |
|--|--|---|
| | <p>(目標を実現した子どもの姿)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は○○さんと〇〇くんが交互に重ねたけど、順番に増やしていったらもっと楽しい感じになったよ。 ・重ねるところと重ねないところをつくったら、今までと違う感じになって面白いな。 ・最後を全員でやったら、終わる感じになったよ。 <p>○振り返りをしよう。</p> | <p>3人組で音の重ね方を考えることを通して、演奏の長さや順番を変えながら短い音楽をつくっている。</p> <p>【技能 (演奏・ワークシート)】</p> |
| 4 | <p>つくった音楽を、表現を工夫して発表しよう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・強弱を工夫の観点とし、よりまとまりのある音楽をつくっていけるようにする。 <p>【思考 (活動の様子・演奏・ワークシート)】</p> |
| <p>【題材目標が実現した子どもの姿】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身の回りにはたくさんの音があることが分かった。音の重ね方を変えたり繰り返したりして、楽しい音楽をつくることができた。【知識・技能】 ・友達と音楽をつくるときに、声の感じを変えてみると面白くなった。強弱を変えてみると、音楽の感じが変わって楽しくなった。【思考・判断・表現】 ・身の回りの音で音楽が作れるなんて思わなかった。友達と音の重ね方を考えるのが楽しかった。歌や鍵盤でもやってみたい。【主体的に取り組む態度】 | | |

4 資質・能力における小中の系統性 (音楽づくり ウ ※中学校は創作)

| 小学校1・2学年 | 小学校3・4学年 | 小学校5・6学年 | 中学校1学年 | 中学校2・3学年 |
|---|---|---|--|--|
| <p>発想を生かした表現や、思いに合った表現をするために必要な次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 設定した条件に基づいて、即興的に音を選んだりつなげたりして表現する技能。</p> | <p>発想を生かした表現や、思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 設定した条件に基づいて、即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能。</p> | <p>発想を生かした表現や、思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 設定した条件に基づいて、即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能。</p> | <p>創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けること。</p> | <p>創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けること。</p> |

5 本時の視点

- ①導入で行う音楽づくりの条件設定が、問いをもつことにつながったか。
- ②教師が子どもの考えた重ね方を取り上げて紹介したことが、話し合いの視点になったり他のグループの重ね方を生かして再構成したりすることにつながったか。

3. 考察

3. 1 成果

・題材を貫く明確なゴールの提示、3人組活動の設定、ホワイトボードの活用したことが、主体的に音楽づくりの活動を行うことにつながった。

・子どもたちが授業でやることがはっきりしていることに加え、「ゴールの姿が明確に想像できる」ことで、意欲が継続し、主体的に学習を積み上げていくことができた。

・本時では、教師の模範（動作化・視覚化・聴覚化・演奏の効果への気付き）により、全員が見通しをもって、音の重ね方を試すことができた。（＝問いをもつことができた）

3. 2 課題

・音の重ねた時の感覚的なよさをどう子どもに気付かせていたらよかったか。（強弱・音色・呼びかけと仕組みを使うことのよさを実感できると、子どもたちはより自らの問いをもって活動できるのではないか）

・グループ学習では、「それぞれの班の深まりをどう見取っていくのか」を考えていく必要がある。（つくったもの・話し合ったことをどのように見取るのか、形として残すのかなど）

参考文献

小原光一，飯沼信義，浦田健次郎（監修） 2020 『小学生の音楽2 指導書実践編』 東京：教育芸術社

小原光一，飯沼信義，浦田健次郎（監修） 2020 『小学生の音楽2 教師用指導書研究編』 東京：教育芸術社

研究発表②

スタートカリキュラム実施時期における音楽科教育の導入例

角田 匡伸

担任するクラスで行ったスタートカリキュラムの授業実践を、活動中の画像や動画を示しながら報告しました。カリキュラムおよび授業実践の詳細は、本誌掲載の投稿論文《実践報告》（pp19-23）にてご確認ください。

研究発表③

Chromebook を使った音楽科授業の実践

杉山 結加奈（静岡市立梅ヶ島小中学校）

1 はじめに

本校は、小学生12名、中学生7名と小規模の学校である。合奏や合唱では全校で取り組むことも多々あり、年齢差や個人差も大きく、より個に対応した授業の実践が必要になる。

また教育現場の現状として、児童生徒に1人1台配布された Chromebook の活用を軸とした ICT 活用や、コロナ禍による歌唱や器楽活動の制限など様々な課題もある。その中でよりよい音楽科授業にしようと挑戦した内容が今回の実践報告である。

2 実践内容

2.1 録音・録画機能の活用

大きく分けて2つの録音機能活用に挑戦した。

1つ目は、模範演奏・模範歌唱の録音を事前に準備し、それを児童生徒が視聴できるように配信して練習をすることだ。この活用のよさは、演奏レベルやパートが違ってても手本の録音を聞きながら自分のペースで練習を進めることができる。指づかいが苦手な児童生徒は動画の再生速度を遅くして、指を確認しながら練習をすることができ、習得の早い児童生徒は自分とは違うパートを視聴しながら自分のパートを演奏するというハーモニー練習もできる。この活用によって、個の学習進度に応じた学びができる。これは、個別最適な学びの第一歩だ。

2つ目は、児童生徒が演奏したものを録音し、自分の演奏を聞き振り返るという方法だ。この活用をすることで、自分の演奏や友達の演奏を客観的に聞くことができるので、よりよい演奏を目指して、自分の改善点を探ることができる。実際に児童の口から、「このリズムを直したい。」「だんだん大きくがあんまりできていないから2回目は頑張りたい。」と言った気づきがあった。

杉山結加奈
2022/06/01

様々なリコーダーの曲に挑戦します。

- ①うみ
- ②アメイジング・グレイス
- ③アメージング上
- ④ロングロングアゴー

この順で挑戦しましょう。

| | |
|---|--|
|  うみ.mp4 動画 |  アメイジンググレイス.mp4 動画 |
|  アメージング上.mp4 動画 |  ロングロングアゴー.mp4 動画 |

2. 2 授業の振り返りやチェックカードとしての利用

授業の振り返りやリコーダー演奏のチェックシートとしても活用した。振り返りをする際はその日の授業の視点からキーワード（強弱・速度など）を決め、その言葉を使って振り返りをさせた。授業の振り返りは評価にも役立った。また、リコーダーのチェックシートをスプレッドシートで作成した。作成・記入することで、児童生徒の進捗をタブから確認することができるということや、それぞれ進度に合わせてすすめることができるのも有効だった。

【授業の振り返り】

| 1 | 日付 | 曲名 | できるようになったこと・わかったこと |
|---|-------|------|--|
| 2 | 例5月1日 | 花 | 3番の後半（ながめをなになに〜）が一番盛り上がるため、楽譜はフォルテになっていて、音が大きくなる。歌詞の盛り上がりや落ち着きによって、強弱が書かれている。強弱記号に気をつけて歌うようにしたい。 |
| 3 | 5月11日 | 荒城の月 | クレッシェンド、レクレッシェンドが続けて出てきているので、声の強弱に注意したいと思った。 また、少し悲しさのある感じなので歌い方にも注意していきたい(?) |

【アルトリコーダーチェックカード】

1人1人の進捗を1つのパソコンで管理できる。タブで他の生徒への移動も可能。

中学生 アルトリコーダーチェック表

名前 割り当て済み

メニューを検索 (Alt+)

| 番号 | 曲名 | 進捗 | 日付 |
|----|-----------------|----|------------|
| 6 | うみ | 🔴 | |
| 7 | アメージング・グレイス | 🔴 | 二番ともの合 |
| 8 | ロング・ロング・アゴー | 🔴 | 2022/09/08 |
| 9 | ソナタK.331 (アルト1) | 🔴 | 2022/09/15 |
| 10 | ソナタK.331 (アルト2) | 🔴 | 2022/09/15 |
| 11 | サムの一とこと | 🔴 | 2022/09/15 |
| 12 | レヴェル・ブレイン | 🔴 | 2022/12/15 |
| 13 | きらきら星 (アルト1) | 🔴 | 2022/12/15 |
| 14 | きらきら星 (アルト2) | 🔴 | 2022/12/22 |
| 15 | 浜辺の歌 (アルト) | 🔴 | |
| 16 | 威風堂々 (アルト1) | 🔴 | 2023/01/12 |

中学生 アルトリコーダーチェック表

名前 割り当て済み

並べ替え 名 ↑ 姓 ステータス

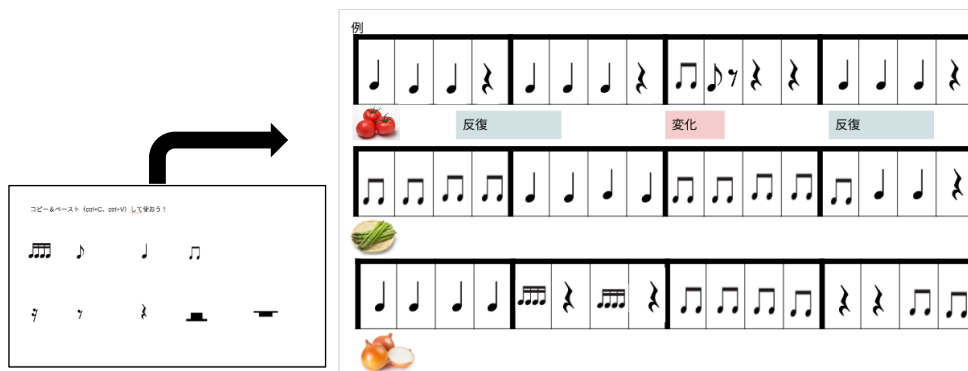
| 番号 | 曲名 | 進捗 | 日付 |
|----|-----------------|----|------------|
| 9 | ソナタK.331 (アルト1) | 🔴 | 2022/09/15 |
| 10 | ソナタK.331 (アルト2) | 🔴 | 2022/09/15 |
| 11 | サムの一とこと | 🔴 | 2022/09/15 |
| 12 | レヴェル・ブレイン | 🔴 | 2022/12/15 |
| 13 | きらきら星 (アルト1) | 🔴 | 2022/12/15 |
| 14 | きらきら星 (アルト2) | 🔴 | 2022/12/22 |
| 15 | 浜辺の歌 (アルト) | 🔴 | |
| 16 | 威風堂々 (アルト1) | 🔴 | 2023/01/12 |

2. 3 創作での活用

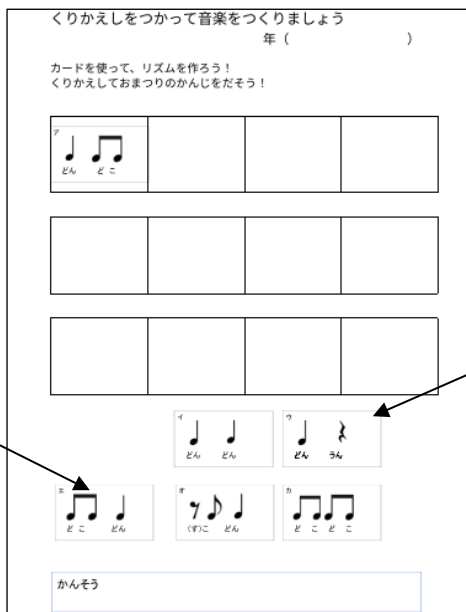
小学校低学年から中学生まで幅広く活用できたのが、リズムを創作する時のワークシートだ。リズムカードを画像で作っておくことで、小節の中にコピー&ペーストを使って何回も試しながら、リズムを模索することができる。画面を大型ディスプレイに映すことで子どもたちが作ったリズムの共有をすることもできた。

【中学生音楽 野菜の気持ち】

コピー&ペーストを使って何度も試すことができる。



音譜カードをコピー＆ペーストで利用。

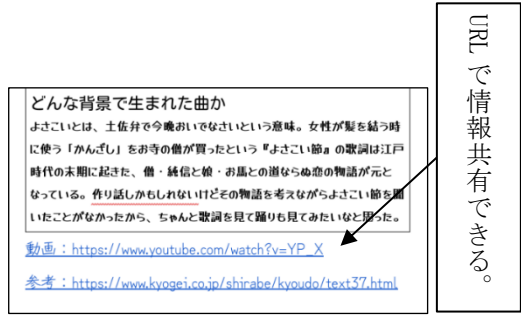
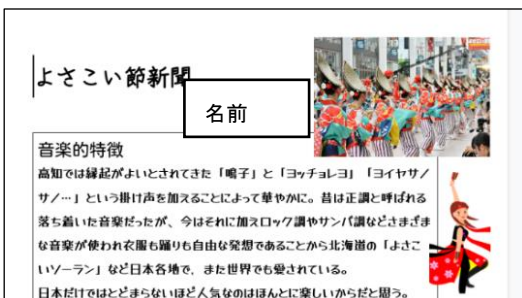


小節を四角い部屋に見立てて、音譜カードを当てはめていく。何度もリズムを試し打ちして、やり直しができる。

2. 4 鑑賞での活用

鑑賞は従来、全員で同じタイミングで聞いていたと思うが、教師側が鑑賞する動画や音源を資料としてクラスルームに配布することで、ヘッドホンを利用して何度も自分のタイミングで繰り返し聞くことができる。また、曲にまつわる調べ学習をする場面では、URLを添付しておけば、各自がウェブサイトで調べることができ、画像や資料の添付もスムーズである。

【中学生 鑑賞・調べ学習】



2. 5 歌唱での活用

高学年の児童には、強弱や歌詞に注目し歌い方を考える授業で実践した。ジャムボードの付箋機能を使えば、楽譜に書き込みをする時に、一緒に相談しながら課題を共同編集することが可能だ。また、となりのシートを見ると他の班がどんな歌い方の話し合いをしているのかがすぐに確認できる。話し合いが進んでいないグループも、近くの班の考えを見てヒントをもらい、考えていくことができた。

【歌い方を考えるワークシート】

どのように歌いたいかな。
強弱・歌詞に注目して考えよう！

やや大きく

段々大きく

だんだん小さく

弱く

チームメンバー

3 考察

Chromebook を使った音楽科教育の成果としては、自分のペースで活動できること、何度も繰り返し聞いたり、試したりできること、評価物をパソコン1台で管理することができること、一緒に考える（共同編集）もできることが挙げられる。音楽科でも Chromebook を活用することで令和の日本型学校教育で求められる個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることができるという手応えを感じた。

課題としては、児童生徒がどれだけパソコンの操作に慣れているかに学年の実態に応じてワークシートを作成したり、単元構成をしたりすることが必要であることや、音楽室の ICT 環境に応じて授業を考える必要があることだ。

今回の研究にあたって、これまでの授業スタイルとして主流の合唱や合奏といった生の音楽をみんなで作りあげるといった場面が少なかったことも課題だ。それは、新型コロナウイルス感染症の蔓延による、音楽科教育全体の課題でもある。今後は、感染防止対策を講じつつ、これまでの授業のよさと本研究のよさを活かした授業をしていきたいと思う。

2022 年度 卒業生 特別研究（卒業論文）題目

| 氏名 | 特別研究題目 |
|-------|--|
| 佐藤 菜子 | モーツァルト「コシ・ファン・トゥッテ」について |
| 飯田 菜友 | 感性を育てる音楽教育とは |
| 大崎 響生 | F.ショパン作曲〈バラード 第4番 へ短調 作品 52〉の演奏表現に関する研究 |
| 紅林 伯彦 | ハ音記号普及のための教材開発・実践活動の提案 |
| 樽林 莉聖 | 音楽や生演奏の良さを感受するための実践について考える ～鑑賞との向き合い方と効果～ |
| 中村 望夢 | ピアノ学習者にとって J.S.バッハを学ぶ重要性 |
| 北條 沙紀 | 3拍子体得の過程—学習方法の提案— |
| 村越 美里 | 音楽的・生徒指導的に価値のある合唱コンクールとは —聴く力を育てる— |
| 村山 舞 | 各発達段階における小学校音楽科歌唱の特徴 —児童の実態を踏まえた歌唱活動の提案— |

「音楽教育実践報告誌」投稿規約

2022年9月21日

1 応募資格

会員登録されている学生から一般会員まで、どなたでも応募することができます。尚、未入会の方は本研究学会ホームページ (<https://www.shizuoka-mes.com/>) の入会申し込みフォームから会員申請ができます。(会員資格については本学会会則をご参照ください。)

2 応募内容

音楽・音楽教育に関わる未発表のものを条件に、次の5つの領域での応募を行います。

(1) 学術研究 (論文)

教育研究、演奏解釈、楽曲分析、教育論等に関する論文で、学術研究としての形式を備え、独創性、有用性を示しているもの

(2) 研究ノート

研究の完成度は高くないが、その前段階としてある程度まとめられたものであり、学会誌の内容としてふさわしいと認められるもの

(3) 実践報告

教育現場での実践例や、教材研究、資料等、会員にとって有用となる報告を幅広く受け付けます。皆さんの日頃の成果を発表いただき、情報共有の場としてご活用ください。また、学校教育現場に関することに限定しませんので、演奏報告、演奏研究等、音楽に関わることであれば投稿可能です。(原稿枚数2～8ページ)

原稿例：

- ・ 授業提案
- ・ 授業報告
- ・ 教材研究
- ・ 演奏報告
- ・ 演奏研究 等

(4) 書評

音楽教育や演奏論、解説、学校教育等に関する印刷物についての検討、評価、意見等

(5) 批評

演奏作品や演奏についての検討、評価、意見等

※尚、応募件数が2編より少ない場合は次号による掲載といたします。

3 応募規定

※ 学術研究（論文）及び研究ノート

- (1) ファイルはA4サイズ 40字 40行を規定値とし、上 35mm、下 30mm、左右 30mmの余白とします。
- (2) フォントの大きさはタイトル及び章、項目のみ 12Point で表記し、内容は 10.5Point とします。
- (3) フォントの種類は、日本字では MS 明朝体、英字では Century を基本とします。
- (4) 図表及び楽譜の大きさ指定はありません。
- (5) 文の冒頭には「抄録（要旨）」を 600 字以内にまとめて表記することとします。その際、研究内容に関わるキーワードを 5 つ以内で表記することとします。
- (6) 応募原稿枚数は、4 ページ以上、上限 20 ページ以内とします。

※ 実践報告・書評・批評

- (1) 書式の規定（ファイルサイズ、フォント指定、図表及び楽譜）は学術研究（論文）及び実践報告に準じますが、「抄録（要旨）」及びキーワードについては表記の義務はありません。
- (2) 応募原稿枚数は、実践報告 2～8 ページ、書評・批評 2～6 ページの範囲とします。

4 査読・審査及び選考

応募原稿は、報告誌の発行のために設置される査読委員会〔学術研究（論文）〕・審査委員会〔研究ノート・実践報告・書評・批評〕によって選定され、掲載の可否が応募者に報告されます。掲載にあたって不適切な部分が生じた場合は、査読委員会・審査委員会より修正をお願いする場合があります。また、万一、著作権及び不適切な侵害行為があった場合は、掲載を取り下げることがあります。（尚、選定結果は発行日のおおよそ2ヶ月前に通知する予定ですが、若干の変動があることをご承知ください。）

5 報告誌の公開

この「音楽教育実践報告誌」は査読委員会・審査委員会を経て静岡音楽教育研究学会のホームページ上にて一般公開されます。また、掲載された論文については、以下のように取り扱うこととします。

- (1) 掲載された論文及び実践報告の著作権は、すべて本研究学会に所属します。
- (2) 掲載された論文等は、著者自身が学術、教育などの目的で使用することを承認します。

6 倫理に関すること

執筆にあたっては、「投稿チェックリスト」（参考：添付資料）をご覧ください、適正に研究、執筆がなされているかご確認ください。「投稿チェックリスト」は原稿提出時に併せてご提出ください。

編集後記

この度、静岡音楽教育研究学会「音楽教育実践報告誌」は、第4号を刊行するに至りました。まず、原稿をお寄せくださった皆様、また査読をお引き受けくださった先生方に心より御礼申し上げます。

さて本号では、査読委員会・審査委員会の審査結果報告を受けて、編集委員会が承認した学術論文1編、実践報告1編、研究発表報告2編について掲載しています。はじめに査読審査を受けた本学教員による学術論文1編については、「新規性」「有用性」「信頼性」の3つの論理展開を重視して厳正な審査が行われました。この査読審査依頼においては、本学会を支えてくださっている研究者や出版社の方々の持つ広域なネットワークに大変助けられました。査読にご尽力いただいた全ての方々と、査読をご担当下さった先生方に重ねてお礼申し上げます。次に、実践報告1編と研究発表2編については、2023年2月4日に開催した本学会第3回定例会の第Ⅱ部において研究発表を行った、本学会員で現職教員3名の寄稿によるものです。これらのことから本号が充実した内容を持つこと、また学術研究や実践事例の成果発表の場として、本誌の役割は大きいものであるといえるでしょう。

また本号で取り上げられた各テーマは、「スタートカリキュラム」や「主体性を育てる」など求められる音楽科授業の実践事例に加え、日頃直面している「デジタル教科書」や「ICT活用」の現状と課題であり、本号が学会員のニーズや実社会の課題に応えるべく智慧を共有する貴重な報告誌となっていると考えます。私は本号で、査読および審査委員会委員長として関わる機会を頂きましたが、5年目を迎えた本学会実践報告誌としての確かな歩みを感じております。

次年度、いよいよ静岡音楽教育研究学会は6年目へとその歩みを進めます。本学会の「音楽教育実践報告誌」が、学術研究論文に留まらず、実践報告・授業提案・演奏報告・書評・批評などの寄稿や投稿によって、音楽や音楽教育に関わりを持つ人々の有益な情報の「泉」および「知」の結集の場となっていくことを願います。会員の皆さまの様々な寄稿を掲載していきたいと考えますので、どうぞ奮って投稿・寄稿くださいますようお願い致します。

最後になりましたが、本報告誌の編集と刊行は、査読・審査委員、編集委員、事務局の多くの力に支えられております。お忙しい中、貴重な時間を割いてご尽力くださった皆さま方に深く感謝申し上げます。

(文責：望月たけ美)

音楽教育実践報告誌 編集委員

田代 和久【編集委員長】

三沢 大樹【副編集委員長】

明和 史佳

望月たけ美【兼、査読・審査委員長】

山口 亮介

山崎 正【顧問（査読担当）】

江田 司【外部委員（査読担当）】

音楽教育実践報告誌 第4号

発行日 2023年3月31日

編集・発行者 静岡音楽教育研究学会

静岡県静岡市駿河区弥生町6番1号

常葉大学静岡草薙キャンパス 明和史佳 研究室内

054-297-6100(代)